

シビルウェディング・ミニスターが語る 心にのこる挙式



素晴らしい結婚生活を送っている2人に尊敬と敬愛を

2002年2月のある日、妻から「右目の瞼が下垂している」と言われ、病院で診察を受けた結果「重症筋無力症」という難病と診断されました。もう二度とシビルウェディ

ング・ミニスターの大役は務まらないなと思っていたところ、妻が従業員教育を担当していた、「モンタナリゾートホテル」から金婚式のカップルがどうしてもアニバーサリーの司式をシ

ビルウェディング方式でお願いしたいとの依頼がありました。

このころは、ステロイド剤の大量療法で私の健康状態が何とか落ち着いていたのと、妻がシビルウェディングの普及に並々ならぬ思い入れがあったこともあって、この金婚式の司式をシビルでやってほしいとのご希望にお応えすることにしました。

2007年4月。会場は、約177ヘクタールの緑広がる森とガーデンに面した広場。80歳前後の夫妻は、共に元学校の教師で、本番前のリハーサルに現れた2人は、誠にユーモアに溢れ、好感のもてる人柄でした。

ご主人には、「戦後の厳しい中、婚約指輪を渡し損ねた。何とかこの機会に妻の薬指に指輪を！」との強い希望がありました。列席者は、家族を中心に親族、友人など70名。桜満開の美しい自然の中で、私はミニスター最後の司式を開始しました。

緑に包まれた場に集まった列席者は、実に明るく温かな雰囲気の方々ばかりで、さすが二人の関係者と思いました。

本番の司式の中では、夫から、「この気の短い男によくついてきてくれてありがとう。今日はその我慢と努力に対し、あのとき渡せなかった婚約指輪を君に贈ります。この先もこの指輪のように丸く光り輝いて、3組の子供たち夫婦と8人の孫の中心になって、元気で長生きしてほしい。本当に有難う」という、妻とし子への感謝のことばが述べられました。

妻からは、「結婚した当時は、身長154センチ、ウエスト58センチのスリムで可愛かった私を、身も心もこのようにふくよかに育てて下さり（本当にふくよかでした）誠に有難うございます。この50年で学んだことは、相手の痛みをわかる人でありたいということでした。これからも何事もあなたと親しく話しあっていますます和やかな人生を……」という言葉で結びました。

続く指輪の贈呈では、永年の思いが二人の目から涙となって溢れました。孫たちからの花束贈呈、子供たちからの祝詞には、笑いあり涙あり、「結婚生活はここまでなくては本物ではない！」と心から感動しました。

最後に私が祝辞を述べることになりました。これまで若い方々の挙式で述べてきたミニスターとしての私の祝辞の骨子は、「明るい家庭は、二人を取りまく多

くの方々との人間関係の中で作り上げられるのです。どうか周囲の方々を大切になさってください」でしたが、この日の祝辞は、その骨子をふまえて、「本日はその見本となるべき結婚生活を構築されたお二人に尊敬と敬愛をお伝えしたいと思います。すばらしいお二人から私は多くのことを学びました」で結びました。

私たち夫婦もあのような金婚式を迎えられるよう健やかに生きたいものと深く心に残った、ミニスター最後の、「アニバーサリー・ウェディング」でした。



シビルウェディング・ミニスター

島崎康雄氏

(しまざき・やすお。1935年3月生まれ。2002年シビルウェディング・ミニスターの資格を取得。挙式の組数は54組)

思い出の

アニバーサリー・ウェディング